

二年生の感想

都留文科大學教授

日比野 登

都留文科大學の社会学科も二年目を迎えた。私は、東京都庁を退職し、この学科ができたときその教員になったのであり、私も大学二年生である。二年生になった感想を問われれば、まあまあと答えたい。まあまあという答は、ホームランを打ったときのプロ野球落合選手の感想だ。都庁時代の友人は顔色がよくなったという。

京浜東北線大森駅から品川駅で乗り換え、山手線で新宿駅に出、大月駅からマイクロボスで大学まで、通勤時間三時間、週三日の大学勤務、一日は大学会館で宿泊する。この生活にも馴れた。夜更しで都庁時代も遅刻の常習犯だった私には、早起きだけがつらい。しかし大学の先生は結構忙しい。始末の講義が多いし、一方通行の講義にならないよう工夫せよという事で、準備がいろいろある。そのほか、一日は会議でつぶれるし、入試の監督とか教員就職のための各県教育委員会訪問とか、北へ南へ出張もしなければならぬ。大学一年生時は、あわただしく過ぎた。二年生になっても講義の数が増えたので相変わらず忙しい。あまり器用な方でないので昔の縁での原稿依頼があっても、できるだけ断ってきた。地元の役所から



の講演依頼も一度だけお引受けした。それでも自治体職員体験をもつだけに、都留市や山梨県などの動きには関心をもっているし、お役に立つことができればと思っている。ただ早合点した後で、歴史的な経過とか、いろいろの事情を聞かされることも多い。まあまあなどと満足していないで、じっくり勉強しなくてはならないし、市役所の人や市民の方からお話を聞く機会もつくらなくてはならないと思っている。

でも折角この機会をいただいたので、都留市のことで昨年来考えていることをのべてみたい。それは一言でいうとなぜ都留文科大學で、都留市立都留大學ではないのかということだ。

いま、どこの自治体でも財政事情が窮屈な中で、大分県知事の言い出した「一村一品運動が話題になっている。しかし私は、都留市には市立大學があり、いまでは全国どこの自治体も真似できないものを

持っていると思う。大学生という形ではあるが、全国から二千人もの人間をひきつけることのできるものを県内の自治体でもっているところは少ない。山梨県の美術館は多くの人をひきつけているようだが、今をわりの文化をつくり出す点で、この市の大学の力はきわめて大きい、といえる。その点で私は、都留市当局は、もっとこの大学を評価し、大学を上手に利用すべきだと思う。少しひねくれた見方をすれば、都留市は、県内の他の自治体、また県庁からもねたまれているので、あまり宝物を自慢しないのかも知れないとさえ思う。もっとも下手な自慢はひとりよがりになる。大学には、時の政治や行政の都合で左右されてはならないものがある。また大学の活動は全国的規模にわたり市政の範囲をこえる。この面では市当局にとつて大学は宝物どころか厄介な存在であろう。実際に市職員の中に、大学の先生は市に住んでもいないのに言いたいことを言うという非難の声もあるようだ。大学の教員が都留市民になることは難しい。しかし全面的に活動するとしても、現代の大学は地域社会から孤立して存在を主張することはできない。その意見では、大学の教員側にも都留の市政や市民に近く努力がいまひとつ足りないという感じがする。

以上は都留市の二年生でもある私の、こわいもの知らずの発言である。ただ不満はあるものの都留市立の大學が今日あるのは、大学側、市側それぞれのこれまでの努力の結果であって、私はこれについてはまあまあというより率直に感心している。そして私は、学内で厚生委員会の一員として、大学や学生が市政や市民と接触を深めるようわずかながら努力している。いま都留市は緑の山々に囲まれて梅雨を迎えようとしている。大学の空にはイワツバメが郡舞し、キ

都留子どもまつり

去る五月二十二日、都留文科大學を会場に第十九回つる子どもまつりを行いました。当日は雨天にもかかわらず、約千三百人の子どもたちや、お父さんお母さんが参加し、楽しい一日を過ごしました。

午前中は大学内の教室を使い、市民団体や学生のサークルによる「工作のくに」、「人形劇のくに」、「おり紙のくに」等、それぞれの団体の持ち味を生かした十五のくに（コーナー）が設けられました。たくさんのお楽しみをたくましく目にしながら、どこに行こうかと真剣に悩む子どもたちの姿が印象的でした。午後は参加者全員が体育館に集まり、ゲームやダンスをしました。日常では体験できないような大人数でのあそびに、はじめはとまどっていた子どもたちも次第にうちとけ、楽しい時間を過ごしました。

セキレイの音が絶え間なく、ときにはウグイスが鳴き、ホトトギスの声を聞くときもある。市民の皆さんにとってはあたり前のことだろうが、東京人の私には、この自然も貴重なものだ。ともかく市民と大学人との交流が深まることは、市の将来にとつても、大学の将来にとつてもよいことだ。これだけは確かである。

六月十日執筆

このつる子どもまつりは子どもたちの幸せを願うお父さんお母さん、学生などあらゆる人々の手によってつくりられています。つる子どもまつりでは今後も一人でも多くの人々と手をとりあって、この運動を大きく発展させていきたいと考えております。市民の皆さんのより一層のご理解、ご参加をよろしく願います。

つる子どもまつり実行委員会
連絡先・小松明子
☎ (43) 4296

